

平成十七年十一月一日発行 第十七巻第十一号 通巻第二七三号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成17年11月号



見えぬもの

高橋将夫

(俳句 十月号より七句)

自然薯のぐるり広めに掘つてあり

霧のなか周りに霧のなかりけり

蓮の実の全て飛びたる安堵かな

ひづみたる時空を雁の渡るなり

名月や見えざるものの降り注ぐ
秋の灯の漏るる心の隙間かな
秋団扇使うてゐたる余生かな
蔓たぐる初めの力加減かな
蔓たぐる隣りの蔓もついてきて
芒野の煙炎となりにけり
阿字観の鷹の渡りとなりにけり

桃 剥 い て
犬 塚 芳 子

蟬 鳴 いて 朝 は 空 から 下 り て 来 る
か き 氷 闇 は 側 ま で 来 て を り ぬ
屑 金 魚 朱 雀 に 向 ひ 掬 ひ け り
落 蟬 や か な は ぬ こ と の 多 か り き
世 阿 弥 忌 や 星 座 あ ぐ ら で 見 て ゐ た り
木 々 は 声 ひ そ め て 鮭 の 川 の ぼ る
頤 に 初 秋 の 冷 え を 覚 え た り
は つ 秋 を 掬 ひ て 顔 を 洗 ひ け り
展 墓 行 す ぐ に あ が り し 夕 の 雨
か な か な を 山 の 鼓 動 と 思 ほ ゆ る

特別作品

芋の葉を揺らして矮鶏の鳴きにけり
笹の露金剛界の光かな
大南瓜蔓はこの世を這ひ廻る
実石榴に割れよ割れよと日の光
庭石の乾いてゐたる菊脰
真ん中の魚板の窪み豊の秋
色変えぬ松に湖畔の光かな
桃剥いてだんだん夜の濃くなりぬ
雲行きの変つて来たる仏手柑
おんころころそわかそわかと落葉かな

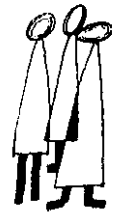
槐安集

市場基巳

子鳥の水浴び晴るる日の暑さ
足を踏みかへて植えゐる余り苗
十一が梢に右を向いたまま
夜蛙の一枚水田鏡なす
葉ごもりに川の螢の吹かれあり

水野恒彦

世阿弥忌の弥山^{みせん}を右に見て通る
秋の蝶とびたる何もなき砂に
仲秋の満濃池に立ちたしよ
石棺に飛び乗つてきし蝗かな
沖の紺よりつながつて鶏頭花



石脇みはる

くれなゐのくさびらに香のなかりけり
水浴びて蚯蚓ももいるなりしかな
黒壁の硝子工房胡蝶蘭
爽やかに朝のコーンスープかな
ふくべ棚^{へぐり}平群の葬儀参列す

竹内悦子

曇り日の烏鵲の橋となりにけり
雨は地を鏡にしたり星祭
火の始末忘れて来たる女郎花
十六夜の蛸を唐揚げしてゐたる
曼珠沙華足の踏み場のなかりける

延 広 禎 一

花火師の黄泉を照らさむ面_う構へ
魂やどる鳥形埴輪天の川
星の恋七_{しつ}宝_{ぼう}枕_{ちん}に眠りたる
おかめ笹やをら緋鯉のあぶくかな
鰯を焼くや山越阿弥陀出づ

中 島 陽 華

八朔や双ヶ岡の鳥の影
酸漿の音出でにけり諸声す
羽衣は子に預けあり夜の秋
わらんべの唐津おくんち泣かずをり
年寄の箸軽くあり洗鯉

栗 栖 恵 通 子

逝く夏の真つ赤な月を喰い残す
秋虹や近くなりたる考_ちの国
処暑過ぎの六角缶に針・鋏
青硯に忘れ潮ある良夜かな
釘打つて霧の満ちくる柩かな

加 藤 み き

とうすみの番いて行つたり来りかな
石段に顚_{こめ}顚_{かみ}に秋の初風
月の夜の胡蝶の群るる砂の上
よなよなの皂角子の実の音なりき
虹いろの衣を残して蛇穴に

大島翠木

厨子あけてありぬ真昼の蟻地獄
片方はゆつくり回る盆灯籠
つくぼうしつくつくぼうし落暉かな
曼珠沙華川藻の匂ひただよひぬ
最澄の山鬼の子に迎へられ

雨村敏子

真竹より金明竹へ盆の風
水琴窟木賊の風となりにけり
冬瓜のおもて拭へば讃岐かな
無花果の濃き匂ひする曲がり角
滑莧の茎の赤いろデスマスク

黒田咲子

烏薬咲きつづき大暑を昨日とす
まだ夏に居坐られをる乳房かな
水掻いて亀横ゆれす今朝の秋
人間の盆に覗いて赤螻
湯の神の霧月夜なり瀬音して



槐市集

中道錦子

かくれみのの花は実となり原爆忌
湿原を色さまざまの夏帽子
蟬しぐれ遠くになりし夫の声
人の卦をきく朝焼の刻なりし
夏山のカモシカ峠水を飲む

西村 純

蛇踏んで影の消えゆく原野かな
夕焼けて千本格子の八咫鳥
鈴の音の白雨となりて夜叉ヶ池
端居して天路歷程思ひをり
きざはしの影のいのちの原爆忌

万城希代子

繋船の船腹高し今朝の秋
海臨む野外ステージ石たたき
原爆忌変らぬものに蟬の穴
盆の月犬の飯粒乾きをり
みんなのやまとことばでありにけり

本多俊子

洗ひ^{はす}鱒嶺に傾く日を前に
海霧^{うみ}の中拾ひあげたる小石かな
曼荼羅の森の木の実の落つる音
色鳥や小町の墓に糞こぼし
海よりもきらめくものに花芒



槐集

高橋将夫選

ブーメラン投げて新涼引き寄せり
鬼灯の燃ゆる宇宙と云ふべかり
六十兆の細胞持ち歩く銀河かな
引力や不眠の身体月に乾す
鶏頭や日がな一日遊戯なれば
椿の実裂け須佐之男命かな
秋草の靡くや古事記日本書紀
彩雲や秋の嶺より神の声
星月夜孔雀の羽根の宇宙かな
円墳の上につぶやく秋の星
仏頭の耳は肩まで青瓢
喜雨あとの空に水色流れけり
白鷺の歩み歩みの波紋かな
風鈴のゆめをうつつをたもとほり
浮き釘を素足で踏みし五臓かな

安城

天野きく江

岩月優美子

中野京子

新涼の老杉にある氣迫かな
鞍馬石吊り上げられし秋の天
眼底をのぞかれてをる残暑かな
ひまわりの大輪の種ほぐしけり
秋の川原円空仏と子供かな
双龍の眼一閃白露かな
露涼し雲母坂へと向かひをり
秋扇笑ひこらへてをりにけり
瓜坊の眼のうるむ星の夜
バンガロー近しかなかなの中
神秘なる石になれなれ流れ星
降臨を信じてをりぬ稲光
海光やダリの石榴となつてをり
蜻蛉や太古の空の鱗立つ
鶏頭にほの暗くある魔の日向

枚方

谷村幸子

近藤きくえ

近藤喜子

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

ブーメラン投げて新涼引き寄せり 天野きく江
戻ってくるブーメランを手に受けた時の心地よさがよく伝わってくる。まるでブーメランが引き寄せたような爽やかさ。

星月夜孔雀の羽の宇宙かな 岩月優美子
星雲の写真などを見ると、宇宙は実に神秘的で、美しいが遠い存在。でも、孔雀の羽といわれて身近な存在になった。

仏頭の耳は肩まで青瓢 中野 京子
仏像の耳は大きくて、長くてめでたい。青瓢が眼目。まだまだ修行が足りない。

新涼の老杉にある気迫かな 谷村 幸子
新涼の老杉の気迫。それを感じさせる老杉も立派だが、それを感じ取る作者の精神の位相も立派。

双龍の眼一閃白露かな 近藤きくえ
双龍の鋭い眼光に白露が見事に照慮している。調べがよい。姿がよい。

降臨を信じてをりぬ稲光 近藤 喜子
空中放電が稲光とか稲妻といわれて秋の季語になるあたり、実

に日本的だと思う。降臨を信じてでも不思議はなからう。

蟬の穴のぞくそびらの化佛かな 西村 純
蟬穴を覗くだけでもけっこう暗示的。そびらに化佛となると尋常ではないが、結局は救われるということであろう。

甘辛の螺²の灰汁なり草いきれ 瀬川 公馨
甘かったり、辛かったり、さらには渋味まであって、まさにカオス。まるで草いきれの状態。

赤鯨や星に告げたきことのあり 本多 俊子
「星に告げたいこと」とはまたメルヘンチック。鯨で一転して誹諧に。察するにごく大衆的、日常的な願いごとなのだろう。

十界図幼な首に汗の玉 竹中 一花
十界図に見入る子供の不思議そうな顔。そして首筋の汗。なんともほえましい。

流星や樹海の声に呼ばれける 中田 禎子
樹海からの声だけでも怖いのに、星が流れてますます怖い。いや、ここまでそうとうと、もはや恐怖はない。

時計草の回つてゐたる銀の皿 植木 戴子
時計草が回って、時がめぐる。無機質の銀の皿が不思議な雰囲気をかもし出している。(以下略)